

中間処理施設から 産廃の動向を垣間見る



豊田ケミカル
エンジニアリング株式会社

(愛知県半田市)

石田一男 社長

協会として施設見学などでもお世話になっている豊田ケミカルエンジニアリングは、敷地面積2万坪の広大な中間処理プラントを持っています。いちはやく時代の流れを見極め、産業廃棄物の処理に着目した同社に、石田社長を訪ねました。

— 業務の中で産廃の占める割合はどのくらいですか。

石田社長 (以下、石田に略) 『創業当初から10年くらいは潤滑油部門が大きくウェイトを占めていましたが、その後、時勢の変化でだんだん廃棄物の業務が増えてきて、今では売り上げ高で7割が産廃になってきています。』

— 産業廃棄物の量は増えてきていますか。

石田『実感として増えています。毎日廃液のドラム缶が500本くらいでしょうか。また最近、有効期限が厳しくなりましたから、期限切れの食品や医薬品が廃棄物の中に増えてきました。それと新製品の製造工程から出てきた薬品類、これが、無作為に混入されて運ばれてくると、化学反応をおこすことがあります。これには神経を使いますね。』

— 様々な産業廃棄物が集まってくる関係上、産廃の現状がよくわかりますね。他に業界で気にかかることなどはありますか。

石田『実は、96年1月のロンドン条約に基づく海洋投棄全面禁止を念頭において、現像廃液の濃縮炉を2億5千万円かけて建設したんです。ところがふたをあけて見ると、これがほとんど増えていないんです。処理能力をはるかに下回るほどしか持ち込まれない。よくはわかりませんが、これはひょっとすると、現像廃液を知らずに下水道などに各々で捨ててしまっているんじゃない

いでしょうか。特に最近増えてきた、街のDPE店などは、現像廃液の回収・適正処理がよく認識されていないのかもしれない。』

— これから新規参入を検討されているものなどはありますか。

石田『乗用車のエアバッグには注目しています。もうすぐ1台に4個のエアバッグが一般化しますが、全部が衝突して膨らむわけではないですから、廃車しても残っているわけです。このエアバッグは今後、適切な回収処理設備が必要になってくると思います。ただ問題としては、どこから料金を頂戴できるのかですね。人命に直接関わるものですから、中古に付いているものを新車に付け直すこともできませんし。ただ量は車の数に比例して確実に増えていくでしょうから、ビジネスチャンスとして期待しています。』



社名/豊田ケミカルエンジニアリング株式会社 所在地/愛知県半田市日東町1-30
代表者/石田一男 創業/昭和48年 従業員/104名 TEL/0569 (24) 9925
事業所/本社 営業種別/中間処理
取扱い品目/汚泥、廃油、廃酸、廃アルカリ、廃プラスチック類、木くず、動植物性残渣、ゴムくず、金属くず、ガラス及び陶磁器くず、引火性廃油、腐食性廃酸、腐食性廃アルカリ、感染性産業廃棄物、特定有害廃油、特定有害汚泥、特定有害廃酸、特定有害廃アルカリ、令第2条13号特定有害廃棄物